
召喚(転生)された(した)オタク少女(現実少年)

真鍋 蛭火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

召喚（転生）された（した）オタク少女（現実少年）

【Nコード】

N4622X

【作者名】

真鍋 螢火

【あらすじ】

雪村千里15歳

車に潰されて死にました。そして召喚されました。オタクなあたしにとつてはウハウハな事、でもタイミングが悪かった。「まだゲームやってないのに！」悪い事はそれだけじゃなかった、「ようこそ、巫女どの」普通ここでは美形という名のイケメン王子が迎えてくれるが千里の場合は小学1年生ほどの王子だった「なによコレ！サイテー、もう嫌こんなところでてくうー」

最強のオタク少女の偽名逃走劇が今始まる！

そして、次は転生した現実主義者の少年の物語、地道な努力の積み重ねで強くなる！二人のその先は・・・

嘘1：シヨツクな始まり（前書き）

初投稿です。 よろしくお願い致します。

嘘1：シヨックな始まり

「ふふふふふ」

歌を口ずさみながら歩道をあくる

『雪村^{ゆきむら} 千里^{せんり}』 15歳

何処にでもいるような普通の中学3年生・・・ではなくゲームオタクだあたしはTシャツGパン片手に小さなビニール袋、もう片手にコーラやポテトチップスが入ったビニール袋といういかにも買い物帰りの人だった。すれちがう人に挨拶しながらあたしは家に入る

「えーと、これでよし！」

あたしはゲームをする時の準備を終えた
はははっ！待っている！ゲーム！

キイイイイイイン

「え」？

くると窓を向くと“赤いなか？が迫る
あ、死ぬんじゃないね

ドゴオオオオオオン

耳をつんざく音のなかあたしは赤い車に潰されて死んだ

「ようこそ巫女どの」

「あ”あ”！」

嘘1：シヨツクな始まり（後書き）

不定期更新です。

嘘1：帰せ！

「ようこそ巫女どの」

「あ”あ”！」

突然ぐるりと目の前が歪み、それが消えて新たに見えた景色とかけられた声に思わず酔狂な声をあげてしまった。そして次は暴言

「なによガキ！」

そう、普通このような場合は威厳のある王が美形イケメンが声をかけるがあたしの前にいるのは小学1年生ほどの子供だった。

残念すぎる！泣きそうであゝ

ゲームやマンガ、本などで見るような王子の服を着ているがマントの裾は長く、床にだらしなくたれており、袖の部分からは手が出ていない

絶対服のサイズまちがってる！

あたしは呑気なことを考えているが周りの者は焦っていた。それもそのはず一国の王子に暴言が吐かれたのだ、この時点であたしは不敬罪に問われかねない

うん！捕まったら脱獄じゃ！

「静まれ」

ガキ王子が偉そうに周りを制した

「巫女どの、ここが何処かわかりですか？」

むうゝ舌つ足らずの声でそんな偉そうに言われると腹立つ。イケメンがよかった！イケボ聞きたかった！

「はいはいゝおわかりですよ。ファンタジーでしょ！あたしは召喚されたんですよ！」

はい！アウト！不敬罪

「……我は、アルミ、巫女どのの名はなんと？」

「ブッ、アルミニウム……あたしは千里」

アルミニウムは無しだぜ……王子

「センリですか・・・うむ、良い名だ」

嘘おつしゃい！ずっと『ちさと』じゃないのか言われてたぜ！

「とにかく！元の世界に帰して！」

「巫女どの・・・すみませんが、戻せません」

「なんでよ！戻し方知らないの？できないの？」

「いえ、できますが・・・」

「じゃあ、やれ！」

「戻すと・・・あなた死にますよ」

「ははっ！マジかよ・・・」

「いいよ、別に」

「「「「「「「「え？」「」「」「」「」

嘘1：何あの王女ムカつく

「セ、センリどの?!」

「何!」

「あなたは・・・」

「あのね!あたしもう絶望したのよ!世の中には馬鹿しかないの!あんな世界、こっちから捨ててやる!でもゲームはやりたい。美^{イデ}形^メキヤラ見て『萌え!』って言いたい!」

「は、話が見えないのですが」

「言葉は見えないっての!聞くものだっての!とにかくまとめると『戻せ!』ゲームは諦めてやるから戻せ!あの世でハーレムやるから大人しく事故で死なせろ!コノヤロー!」

「あらあ、それは困りましたわねえ」

いつの間にやって来たのが中学1年生程の女の子がいた。非常に目に痛いピンクのドレスに身を包み、片手に古ぼけた本を持っている「あつ不審者!」

「失礼ですわね!このクズ女!」

ただひとつ思った事ハ・ラ・タ・ツ!

「古っつい格好で!なんですよ、その髪色は!」

「日本人特有の黒髪ですよーだ」

「黒髪?なにを言っているんですの?このクズ女は」

「は?」

うん、ハ・ラ・タ・ツいつか消す・・・えっ!

腹立つ王女に疑問を抱いた

あたし今どうゆう・・・

足元を見た。足首まで水が張ってあるが不思議と冷たくない、足を上げるとまったく濡れていなかった

「プツ、なにをやっているのですか」

はい!無視!シカトしてやる!

足を下ろして水を覗く、あたしが映っていた。

おいおい神様、勘弁してくれ。これがあたしなのか？

水に映ったあたしは18歳程の容姿で膝まであるミュールに白い、ゲームで見たような巫女服、腰に届くような金髪に碧の瞳だった。顔立ちも前と違い美人だったはつきりいって別人だ

何これ？FEの巫女様か？あついやあつちの方がカワイいわ、こっちはカッコイイ、男装できるかもね髪切って！つか胸ないし・・・

「さあクズ女聞きなさい！」

「・・・・・・・・」

シカト～・シカト～存在は空気～

嘘1：何あの王女ムカつく（後書き）

ファイアーエムブレム暁の女神のミカヤ（FEの巫女様）とテイルズ（存在が空気）を入れました

嘘1：なに、このゲダさ

「……………と、言う訳ですわ。おわかりになって？」

「いいえ、さっぱり」

聞いて無いし

「……………ならばもう一度」

ピンク王女は怒りに肩を震わせながらまとめて言った

「わたくし達の望みを叶えていただきますわ」

「うん、断る！」

「な、なんですって！」

いかにも心外だという顔だ

「だってさあ、アンタらあたしに何かしたあ？なんもしてないですよ。」

「あたりまえですわ！あなたはこの国の巫女であり『シモベ』なのですから！」

「給料でる？」

「でません！」

「うわあ、完全に奴隷じゃなかあゝ、帰せゝ。死ぬから！ハーレムか転生するからゝ！」

「そうはいきませんわ！」

ピンク王女は言い終わると同時に古ぼけた本を落とし、足で踏みつける

ぐりぐりとヒールの踵で踏みつぶす。

痛い、見てると痛い！

ピンク王女の手に戻された時にはもう穴が開いていた
うわあゝ、あの本結構厚いよね。踵のトコ鋭かったりして

「オーッホッホッホッ、これで貴女は戻れませんかよ」

ピンク王女は勝ち誇ったような笑みを浮かべる

「え、なに？どゆこと？」

ずうつと黙っていたガキ王子が久々に喋り出した

「あ、あれが召喚の魔道書に当たる物でして・・・そ

「ハイ！戻れないフラグ！」

今決定した、あの王女絶対殺る

「ふ、ふらぐ？」

「ほーほっほっほ、わたくしの勝ちですわ」

「・・・」

「お、お姉さま・・・」

「さあ、いきましようか。巫女！期待してあげますわ
言い終わると全員がそそくさと出て行ってしまった。

「ええー早速放置プレイー！かんべんしてくれえ」
ついてないよー

嘘1：不審者と神通力

放置プレイされて早34分あたしは部屋の中央に体育座りている。

「んゝやつぱりおかしいよなゝこんな筈は無いよねゝ」

もしここに誰かがいた場合、あたしは危ない人と痛い目で見られただろう。

あたしってアイタタタな人間だな

すると突然あたしはめまいを起こした

「うわ！フラグ！？」

そして頭に景色が浮かんた。目は見えないが頭に浮かんた景色はしっかり見ることができた。

『うわあああああ！逃げろっ！』

必死に逃げる男性と女性、腕には赤ん坊が抱かれていた

『あああああ！お母さん！』

土砂に押し潰された家の前で泣き叫ぶ男の子

『そこには駄目！巻き込まれる！』

その子を抱え走り出す女性、だが、全て土砂に飲まれていった。

「！」

そこで頭の景色は消え、目が見えるようになった。

「なによコレ！」

「どないしたん？」

「おう！？誰！」

突然かけられた言葉は男の物であり関西弁だった。痛いほどに和やかだった。

「空気読め！このKY野郎！」

「けーわい？なんやそれ？」

「どーでもええわっ！それより誰だ貴様！」

「わてのことか？わてはゝわてはゝ．．．なんやったつけ？」

「知らんがな！とにかく姿見せる！」

「んゝわてはこの部屋の霊じゃけ、姿は見えへんよゝ」

「ユーレイキター！」

超ファンタジー！

「へっへっへっへ、気に入ってくれたか？」

「うっん！全然！」

「さらりと酷いこといいまんなゝ」

「で！用は何？」

「あゝなんか叫んでたからなゝなんやと思ってな」

「いや、頭になんか浮かんで．．．」

「なにが？」

「土砂災害」

「なんやて！？そりや大変じゃ！」

「え！なにが！？」

ゆるい関西弁が突然激しくなった。

「巫女さんが頭ん中で見たのは未来に怒る災害や」

「ほー流石巫女ゝ」

「とにかく王さんに話つけとくわ」

「えっ！行くの！？」

「．．．」

「行っちゃった、いい話相手見つけたと思ったのにゝ」

あたしは立ち上がり窓を見る、窓といっても壁の代わりとでも言うかの様にガラスが張ってある。

「壁がガラス張り．．．」

外がすぐに見ることができると不用心にも程がある外には雨が激しく降っていた。

「雨がなければ土砂災害起きないかな？」

しばらく悩んだ結果、あたしは右手をにかけて叫んだ
「天照る神よ！この地に光の恩恵を！」

言葉の途中に右手を降ろした

「わーい一回こーゆのやりたかったんだよねー」まあこれで晴れはしないか」期待はしてないわー」
だが、外はカラカラに晴れていた。

「うそおお！？世の中うまく出来すぎ！」

嘘1:よし!逃げようか!

「おおゝ流石、巫女さんやなゝ」

「見てたの・・・」

「ああ、そや。にしてもさっきの呪文は何や?つくったんか?」

「大神の台詞を台にして・・・」

「狼?」

「もういいし・・・このKY野郎」

「けーわい?」

「あんた名前無いんでしょ?」

「そや」

「じゃあケーワイね!」

「おおっ!そか!ケーワイかあ、名前貰うので案外嬉しなあ」
由来が空気読めないとは言えない

『ふむ、巫女がその様な・・・』

「せやなゝ、流石って言うところやな。オマケに名前までくれたんや

ゝ「ケーワイ?ってな!」

『ケーワイ…変わった名だな』

「そか?いい名前やと思うけどなあ」

『では、契約を・・・』

「あゝヒマだゝ」

あたしは今度は寝転がっていた。水につかっているが息はできていた

「こんにちは」

「おぐっ!?!」

今度は頭に直接響く声で先程までのケーワイの声と違った。

「なんかおかしい！」

「ひとつ言うてええか？」

「はい！どうぞ！」

「わてと巫女さん契約したからこれから一緒やでえ〜」

「ふ〜・・・っあ！？マジで！？」

「そや」

「うわ〜ん、契約とかするならイケメンとしたかった〜」
イケメンとの契約は夢だぜ！女の！

「失礼なこと言われてはるな！」

「なにコレ！もう嫌！こんなとこ出てく〜！」

嘘1：え、名前？何それおいしいの？

「ふう、外じゃあ」

「何呑気な事言つてはるん、さつさと戻るでえ」

「ヤダ！」

あたしは今城下街にいた

「よしっ」

「なにっ・・・」

バリン

「何突き破つて・・・あああああああああ！」

「いいでしょ、別に、何処にしようがあたしの勝手！」

ケーワイから説教されているがあたしには聞こえない。ズンズンと城下町を進む、周りは人でいっぱいでありいかにもこの国が栄えている事を示していた。

「お譲ちゃん、あんた冒険者かい？」

不意に声を掛けられた。声の主はちょうどあたしが横を通りかかった店の主人のおばちゃんだ。店は地面に絨毯をしきアクセサリーを並べていた。

「えっと・・・はいそうです！」

「巫女はん！」

ちゃっかりケーワイに突っ込まれたがシカトしてやった。

わーい、冒険者だーい。まあ、「いいえ巫女です」なんて言えないしね！ケーワイ！うるさい！

「へえー、そうかい。でなんか買つてくかい？」

「商売がじょうずですね！うん！買おう・・・金は？」

あたしはポケットを探るが何も入っていないかった。

当たり前っ！か不親切だあ！

「ああ、すみません！買いたいんですがお金なくて・・・」

「まさかつ、無一文なのかい？」

「はい・・・」

「そ、そうかい・・・ならうちで働くかい？隣国に行きたいんだけど・・・最近山賊がでてねえ、危ないから行くに行けないのよ。

護衛を頼まれてくれるかい」

護衛〃ここから出れるし金が・・・

せーの

「やります！」

「そうかい、そうかい！わたしやギドだよ。お前さんは？」

「千・・・セナです」

セナというのは今適当に考えた名だ。

「セナちゃんかい！じゃあさっそく行くよ」

「はいはい」

嘘1：護衛

「あー、もう出ていってしもうた」

「いーじゃん、別に」

「・・・」

馬車の後ろに座ってあたしは痛い人になっていた。無論、あたしからしてみれば自分の中の霊と会話をしているだけなのだけど・・・
「ハアー、もうええ！わても腹あくくって巫女はんの、聖霊としてがんばるわ！」

「おお！ようやくわかってくれたか！納得納得」

「つか、関西弁と広島弁が混ざってきてないか？」

聖霊と巫女がグダグダと話していると、先程までいた国の外壁がもう見えなくなつた。馬車は全速力で走っているらしい。

ヤバい、ケツ痛い

「じゃあ、巫女はんこの世界について説明します。まずはお金についてな」

なっ！KYだあー

「ここでは、金貨・銀貨・銅貨の三種類が使われていて・・・」

「ゴールドとかじゃないんだ」

ちっ、残念

「せやな、金貨3枚あれば豪邸が建てられるで、城のほうは金貨30枚ぐらいやな。」

「ふーん、なら普通の人は金貨持ってないね。」

「銀貨1枚か、銅貨40枚が一般的や、ちなみに銅貨100枚が銀貨一枚、銀貨100枚が金貨1枚といった所や」

うん。わからん

「ふーん」

「あとは」

「あー、一般的な知識は必要な時に教えて。今は戦い方について、

護衛やってるし気になるし」

普通の話は面倒だし

「簡単やぞ、普通に物理で殴りにいってもええし、武器買って使えばええ。巫女はんがここで自分の身を守るよう、戦闘的な能力は召喚された時についてるはずやから」

「ふーん、じゃどんな武器も一発で使えるんだ。なら魔法も使えるよね。」

「そやな」

「うわあー、専用の職業クラスにならなくても、スキル上げなくてもいいんだあ。こーゆーゲームは……」

「話が読めまへん」

うん。聞くもんだし

あたしがブツブツとつぶやいている時、城はパニック状態だった。何かが壊れたような音が巫女の部屋からして兵達が駆け付けた時にはオリミス製の壁が破られていた。『オリミス』とはオリハルコンとミスリルを錬成して強化した物であり、絶対に割れない、折れないと言われている。色んな意味で城は大混乱だ。が、セナはそれを知らない。それに付け加えて巫女が獣に攫われたと勘違いして、捜索隊が作られて、賞金まで掛っていることもだ。

「あー、なんか色々あったよなー」

あたしは今までの状況を振り返る。

死んだと思ったら召喚されて戻ると死にます宣言。それでもいいと戻ろうとしたらその手段も断たれた。拳句には脱走して国から逃亡。あー人生ってわかんない

と15歳らしからぬ考えを浮かべて思わず苦笑してしまう。

「あーああ、これからどうしようか」

「気長にいきましょ……!」

「ん?どつたのケーワイ」

「て、敵や!悪意を感じるで!」

「へ？」

マジかよ！

あたしが周囲を見渡すと何もいない、だが人の気配は感じていた。

「ギド！止まって！」と声をかけて馬車を止めて、腰をあげる。数歩前に歩み出て「誰！」と声をあげるとケーワイが「後ろや！」と叫ぶ、無論後ろから迫る敵に気付いていたあたしは斧をよけて敵の背後に回り込む。拳に力を込めて男の背を殴る、男は一撃で地面に屑折れる。あたしの右腕は光を帯びていた。

「強！てか神レベいってんじゃないの？」

本能最強伝説キター

迫り来る敵を薙ぎ払う。5人のうち、動ける者は1人のみで何かを叫びながら突進してくる。あたしはまず飛び退いて距離をとる
ははは、ファンタジック

右手を敵に翳してさらに力をこめると光のレーザーが敵を打ち抜く。敵はあっさりと地面にひれ伏す。

残りの敵も、と光で鞭を生み出して振るう。結果、あたしの圧勝だった。

「まあ、まあ、凄い。ありがとねえ。セナちゃん」

馬車で馬を引いていたギドが感嘆の声をあげて笑う、あたしもつられて笑うと馬車に腰を下ろす。ゆったりとした動きで馬車は進み始めた。

嘘1…ぎじぎじぎじぎじぎじぎじ

ガタゴトと馬車に揺られていたあたしはぼんやりと空を仰ぐ
光で武器造れたけど、他はどうか？

あたしは少し念じると手に光の杖が出来た。

「おおっ！」

もう一度念じて消すと、次には光の剣を造った。

「来たあああー！…あー、でもさあ、あれだよ、色がない。
つまらん。今度武器買っ！」

「巫女はん、びっくりするからやめてえな、いきなり大声出すの」

「あー、ごめん、ごめん」

当たり前だがギドに「どうしたんだい？」と聞かれた。もちろん笑
ってごまかした。ため息をついて寝転がる。

「あー、なんだかなあー」

あたしは日に照らされながら眠ってしまった。

『どうだった？』

『いつも通りのオール3、ただし2に近い』

『ずっとだな、まあ、3、4ぐらいなら竹高行けるだろ』

『あ、よかった。〇〇はどーすんの？』

『近いからやっぱ竹高かな』

『よしっ！なら、高校で二次元を証明してやる』

『バーカ、信じる訳ねえだろ。』

『バツ、バカって…』

『事実だろ、俺はオール5。テストは100点しか取ったことねえ』

『…このっ、現実主義者！リア充！』

ガタン

「お！」

目が覚めたら夜だった。

嫌な夢見てしまった

苦笑すると馬車が止まっていた。

「ギド、どーしたんですか？」

「ああ、セナちゃんかい。検問だよ」

「検問って・・・ケーワイ！」

「違反や疑わしいことがないかどうか調べるんや。国境付近でやってたりするんやけど橋に掛けるなんて、なんかあつたんかな？」

あたしはじつと検問所を見つめる、長い行列が出来ていて不満を唱

ウォンテット

えている人が大半だ。行列のさきでは兵士が指名手配所のようなビ

ラを配り、「こんな人を見かけませんでした？」と聞いている。巫

女補正が掛っているらしく良く視えて聞こえる。良く見ると尋ね人と書いてある。そこには良く見知った顔が書かれていた。金髪碧瞳の男と間違えられそうな繊麗な顔立ちの人間、あたしだった。

「フ・ラ・ゲ！・・・どうしようどうしようどうしよう」

「あー、おしまいやな」

「クソオ、このKY野郎っ！」

あたしの頭は真っ白だった。逃げると怪しまれるし、このまま行く訳にもいかない。

「どうしようどうしようリアルにピンチ！」

嘘1：いい人だあ！

「いや、どうしようか！」

あたしは小さな声で言った。かなりの早口で自分でも聞き取る事は出来ない。

「どうする？ケーワイ？」

「わてに聴かれても困ります。」

方言のような訛り方で言われるとなんか脱力

「ああ！もう！どんどん進んでく、次の次の次の次じゃなか！」

「4番目やな」

「KY野郎！」

あたしは腰まで届く金髪をかきむしって綺麗に整えられた髪型を崩す。前にいた世界では癖毛だったため出来ない事だ。

くそお！あんな奴等に利用されるから大好き二次元諦めて死のうと思ったのに！結果はあいつ等の勝利か！こうなったらまた脱出して逃げるか？ケーワイはしゃーないし。諦めてっと！つかさ、何？契約って？しかもここに来るまでのハイスピードコント的な何！

「あ、巫女はんの番やな」

「KYだあ！」

何故かあたしは荷物の影に隠れる。相手からは見えない筈だあたしも見ることはできないが、声なら聞こえる。

「あの、こんな人を見ませんでしたか？」

「！……し、知らないねえ。」

「え？」

「

「そ、そうですか。」

「なんで探してるんだい？」

モンスター
『魔物に拐われたんです。オリミスが破られていたんで確かです。』
『オリミスがかい?!』

「おりみす?」

「オリハルコンとミスリルを錬成して強化したもんや」

「それでオリミスねえ・・・っえ!オリハルコンとミスリル!? ガラスじゃなくて!・・・巫女補正最強!」

『じゃあ、失礼するよ』

馬車は進んだ。が、問題がある。とてつもない程のスピードであり、あたしはガタガタと揺れる荷物にぶつかっていた。

「*#↑! ∞ H A Y I・¥” S I、?「# N U」。」

酔う酔う酔う酔う酔う酔う具が出る具が出る早い早い早い死ぬ死ぬ死ぬ

あたしは情けない声で叫んでしまう。声は堪えているが・・・

ゆーかい?なにそれ、おいし・・・違う違う違う。知らないって! ええええええええええ!?

一時間程その考えを巡らせていた、無論荷物に頭をぶつけながらだ。急に馬車が止まる。前に引つ張られるような感覚に襲われた。

具が出る!ヤバっ・・・れ?

外に目をやると小さな村が見えた。

「セナちゃん、大丈夫かい?」

「ギドさん、あんなスピードどこから出しているんですか・・・この馬は」

「商人としては当たり前だよ。奥の手さあ!」

く、車以上だぞ・・・

村はナサハというらしい。宿屋でギドに教えてもらった。報酬と一緒にだ。銅貨40枚だ「多い?」とケーワイに聞くと「多いなあー!」と返された。オマケに武器を譲ってくれるらしい。あたしはもち

ろん剣を選んだ。日本刀が何故かあったため、それを譲ってもらった。和の国の武器らしい。

「ファンタジー日本なのか？……あつ！」

「どうしたんだい？」

「あつ、いや、なんでもないです……はい」

「そうかい、ああ、そういえば、さっきのはどういう事だい？」

「むっ！いや、なんか……あたしは……うーん？……！……

・貴族の養子でして、生活に不自由は無いんですが外に出られなくて。国が魔物に襲われた隙にオリミス製の窓からでてワープして逃げ出したんです。」

セナが千里だった頃、最後に造っていたゲームの主人公の設定に手を加えて出した嘘だ。

ケーワイから聞いた話だけど異世界召喚は秘密でしょ、探すに相應しい自然な理由はこれしかない……よね？

「そうかい、そうかい、よし！なら服をあげようか！その服は目立つからね！」

武器に宿代に服って……いい人すぎる！……つか、巫女服目立つのか？

嘘1：僅かな昔と今最高！

「どう、似合う？」

あたしは着物＋ワンピースみたいな紫色の服にブーツを選んだ。腰の赤い帯に日本刀をさす。ちなみにこの世界では和刀と言っらしい。「似合いまんなあー」

「うん、うん、似合ってるよ！セナちゃん！」

ケーワイとギドの声が掛け合っているようにしか聞こえず、笑ってしまった。

「それで、セナちゃんはこれからどうするんだい？」

「捜索隊が来そうなんで、逃げます。あつ、でも冒険者として行きたいんで適当に放浪するつもりです。」

あはは、なんか矛盾してる気がする
「そうかい・・・まあ、セナちゃんならやれるさあ、あんなに強いんだから！」

『うわああああ！』

「なんだい！」

宿屋の玄関から人が飛び込んできた。

「ア、アンデットだ！」

「アンデットですと！オタクとして・・・フフフ。ギドさん、ちよつくらアンデット殺ってきます！」

あたしは村へ飛び出した。ゾンビ、スケルトン、ゴーストが大量にいた

わーい、ファンタジーの世界の定番じゃい！消せ消せ！

「破壊魔法！デ、デリート！」

叫びと同時に光る右手を降ろした。あたしを中心に光の波動がアンデットに襲いかかった。

ネーミングセンス・・・

逃げる暇も与えずに光の波動はアンデットを消していった。

「フフフフフ、あたしのネーミングセンス悪っ！」

『す、凄い・・・あんなにいたアンデットを・・・一瞬で・・・』

「あ”？」

宿屋には酒に酔った人や酒を進めている人、踊っている人などがいて、あたしはその中心にいた

「ほら、ほら、嬢ちゃんもどうだい？」

「け、結構です！」

「？飲めないのかい？18歳だろお？」

見た目はそうだけど精神年齢は15だったの！あれ、見た目なら飲んでよくない？

「おや、セナちゃんおはよう」

「おはようございます。ギドさん」

「もう、いっちまうのかい？」

「はい。」

「あたしや、商人だからね。また会おうね、セナちゃん！」

「はい！」

「行くあてあるんかあ？」

「ないね！」

「自慢げに言われても困るわなあ」

あたしは平原を歩いていた。何もない緑の平原だ

「あゝ！ファンタジー最高！」

広いし、テスト無いし、自由だし、金に悩まんし、進路にも悩まん！

「ファンタジー？」

「あたしから見てこのことよ」

「？・・・あんなに戻りたがってたのにか？」

「ああ、あれは王族、貴族に遣えるのが嫌なだけよ。今みたいな剣士を望むわよあたしは」

ゲームのクエストだと権力関係後味悪いし、なんかやだ

「変わってはるな、巫女はんは」

「変わってるわよ。オタクだしあいつに現実を見ろってよく言われたよ」

あたしは腰の刀を抜く

あいつがいたら二次元証明できたのに

あたしの行くさきには緑の平原が広がっている。

嘘：1クエスト買った。高い

「あー！」

あたしの背後に何かが迫ってきた。アクロバットで避けて何かの背後に回り込む

「！」

それは一回り小さな人間だが人間ではなかった。浅黒い肌を取って付けたような服にサビサビ・ボロボロな武器

「オークじゃん」

「ギューイイイイ」

「仲間呼んでますな」

「は！マジかよ！」

案の定オークが大量に来てあたしに飛びかかって来た。そいつを刀で斬る

「切れ味良すぎ！」

こえーよ！

始めの犠牲者はすぐに動かなくなった

「キョエエエエエエ」

他のオークも向かって来る。あたしは刀を振る。鮮血、刀の光、オークの死体が辺りに飛ぶ。だがまだまだオークは湧いてきてあたしは囲まれた。

「うん、リアルにピンチ」

でも、かつこいいい！ファンタジー！

じりじりとオークは間合いを詰めてくる、あたしは刀を振り上げた。
チャリロス・ブラッサム
「桜消魂！！」

叫びと同時に刀を地面に刺す、そこから生まれ出た桜の衝撃波がオークをなぎたおす。

「おしゃっあ！全滅じゃ！しかもできたし。巫女補正は敵に回したら死ぬ！……よし！行こー！！」

フフン、あの必殺技が出来るとは・・・にしてもこれからも偽名かな、んゝ怪しまれても逃げ道造つところ。兄妹設定で・・・・ぐれいど・・・グレイドでいつか19ぐらいの紫ベールのお兄様みたいな・・・決定！服とベール買わないと！

超特急であたしは草原を駆ける、巫女補正で疲れず走る事が出来る。2、3時間程走り疲労の影が見え始めた時に新たな街が見えた。

「よ、よしゃ・・・」

普通に歩いて街に入る。召喚された時の街よりも小さい（城下街だったので当たり前）が活気は同じぐらいにあった。そこであたしは紫ベールを20銅貨で買った。値が張るのは（高いらしい）魔法が掛けられているからだそうだ。2銅貨で宿を取り、「金の基準がわからねえ」とつぶやきながら部屋に入る。ベッドにテーブルの粗末な部屋だったが「さすがファンタジー」でまとめて街を歩くことにした58銅貨で服を買おうかと思ったがファンタジーゲームや小説であるクエスト屋で稼ごうとまだためる事にした。（ちなみに荷物はRPGで言うアイテムボックスに入れておいた「巫女補正」神と学習した）

「ファンタジー最高」

小声で呟くあたしを街の人は見てくる。

このキャラ綺麗だしね」

「あつ、てかなんでこの姿なの？」

「それは巫女はんが望んだ姿や」

「へ？別に望んでなんか・・・あ」

『やつほゝい！・・・！あんた神だよ！こんな美少女造るなんて！』
『別に言われた通りのキャラグラにただけだし。』

『だから、それをCGでここまで再現できるのが神なんだ！あたし、こんな風になりたい！』

「望んでた・・・」

「ええっ！なんやなんや！その落ち込みよう！」

「いや、あいつに借りができたなと」

「あいつ？」

「うん、えーと・・・あれ？名前何だったけ？」

「召喚の時に記憶が溢れたんやろ。暫くしたら思い出す筈や」

「ふーん・・・！？」

ケーワイとの会話に集中していて、前を見ていなかったあたしは三人の大男にぶつかってしまった。

「あー、なんだねえちゃん？」

リーダー格の大男があたしに話掛ける。

「す、すみません！前を見ていなかったもので」

ヤバイ、勝つあげられそう。街の人間は「可哀想」ぐらいで見てもぬふりしてる

「「前を見ていなかった」だとお。」

「はい！すみません！」

あたしは頭を下げる。

ひーん、怖い怖い怖い怖い

「謝ってすんだら兵隊はいらないんだ！」

リーダー格の左側にいる大男が何故か殴りかかってきた。あたしは軽々とそれを避けると、リーダー格の大男以外の大男があたしに殴りかかってきた。街の人間は「面白そうと」スペースを開け、見物している。

助けるよ！つか荒いよ男！

軽々と攻撃を避けながら撃退法を考える。

武道で行く？テイルズのソフィみたいにエクシリアの・・・決定！あたしは両腕に力をこめ、光らせると目にも止まらぬ速さで大男の懷に飛び込み腹を殴ると足で蹴り、飛躍する。そうして、もう一人の大男の後ろに回り、殴る。二人の大男は動けない。後はリーダー格の大男だけだ。案の定、怒り任せで殴りかってくる。「甘い！」と、あたしは腹を蹴り、ノックアウトした。回りから歓声上がる。

溜め息をついて光を消す。

「疲れた」

あたしは歓声を上げる人間の中を通り抜ける。あたしは人混みが苦手なので道を開けてくれたのが幸いだ。暫く進んだ先にビラを掛けた屋台があつた。

「何あれ？」

「クエスト屋や」

「おしゃっ！」

よくわかんない歓声を上げて、ビラを見る。ナサハ村の依頼が多い、『悪徳商人をたおせ！』という依頼が楽しそうなので、28銅貨で買った。とにかく村に戻ろうと人のない場所まで移動する（ワープが使えるらしいので）。目を閉じ、ナサハ村を想像すると体浮いたような感覚がして、もとに戻った時にはナサハ村の入り口だった。

嘘1：バリアがかてーんだよ！

「はぁ……」

「？……どないしたん？溜息なんかつきおって？」

「いや、今日の正午にカツコよく出たのに夜中に戻ってくるとはねえ……」

かつこわるゝい【эдэ】

「まあ、しゃあないしゃあない、『3つの悪商人を倒せ』のクエストでここが知ってるトコやったんやから。」

「夜中で誰もいないし、さっさと済ませて出ればいいか……」

夜中の2時（時計見た）になり、「こんな時間まで起きてたの初めて」とぼやきながら山奥の屋敷に向かう。

クエスト

ナサハ・ミナク・クヨフの3つの村に悪い商人がいます。倒してください。

「荒いなあゝ、逮捕で押さえる（^-^）」

「な、なんか変なもんが見えたで……」

「気のせい気のせい」

クエストをしまうと果ての見えない山を登る。ケーワイに聞いた所、金の為に暗殺も辞さないため、つもりにつもった怒りは殺人というらしい。しばらく上った先に夜をバックに不気味な屋敷が存在していた。

「……ファーンタジック！」

「うわぁ！びつくりした！」

「おっと、すまねえな！」

「ど、どこからどう突っ込めばええんや………まあ用心棒いっから気を付けるんや！」

「用心棒？」

「名前は知らんけど強いらしいで」

「・・・ちつ、使えねえ聖霊だな」

「ええ！ちよつ、まつ」

「さあ行こう！」

ぐちぐち言っているケーワイを無視して屋敷に入る。もちろんノックした誰か出てこなかったため、勝手に入った。中央に階段があり、その奥に扉のある簡単な造りだ。

「しょぼっ！」

だが、成金風の造りで赤い壁やカーペット、金の装飾がされている。成金は敵やつ！潰す！

あたしは迷わずに扉を開ける。

「しつれーしまーす」

はっ！なんか違う！

「・・・何か用かね・・・」

同じく成金風の部屋の奥にある成金風な机の椅子に成金風の服の男がいる。60代ぐらいだ。

「えつと、クエスト」

「くえすと・・・冒険者かね」

「イエス・・・じゃ、アデュー」

「！？」

刀を抜きながら斬りかかる、斬れたはずだった。

「！」

男の前にバリアが張ってある。刀はそこで止まり、激しい火花を散らしている。

「ケーワイ！」

「おしゃっ！まかせんしゃい！」

力が宿る。こんな事が出来るなどあたしは知らなかったが巫女補正で本能に刻まれたようだ。

「はあああああああああ！」

「おりゃあああああああ！」

バリアが破れる、刀が通る。鮮血が飛び散る。

「勝ったあああああああああああああ！」

「巫女はん・・・うるさい」

「いーじゃん、いーじゃん・・・じゃつ、次！」

嘘1：終焉（前書き）

総合ユニーク千人越え&PV五千越えありがとうとおおおう！

嘘1：終焉

「ミナクじゃ！」

ナサハの次に行った街（ハイク街）にワープし、南門をくぐり、平原を歩く。

「南に行けばいいんじゃないのうて、船に乗るんやて」

「わかってるって……あつ」

あたしはアイテムボックス（かつてに付けた）から紫ボールを取り出し、かぶる。不思議な事にきつちり前は見える。あたしは今、黒マントに白いブラウス、黒い革のズボンを着ている。刀はアイテムボックスに（元の服も）おさめ、現在は薄く平べったい輪の形をした投擲武器、チャクラムをベルトにくっつけている。マジックアイテムらしく、セナ……グレイドでしか取れない。ちなみに、装備一式は先程の成金屋敷からマシな物を失敬してきた。

「男だ、男だ……あつ」

「巫女はん？」

「なんだ？」

低い男声で話す。

「巫女はん！すごいわ！これじゃあホンマに男や！」

腰までの金髪に碧の目、繊麗された顔を覆う、飾りのついた紫のベール、飾り気のないブーツに黒い革のズボンに白いブラウス、それを覆う黒マント。誰も女とは思わないだろう。

「次からはグレイド、声を低く」

女声に戻す。

「そういえば、眠くならないのだが？」

男声に戻す。

「巫女補正や」

「ふむ、奇怪だな」

「……」

ヤバイ！グレイドヤバイ！萌える！萌え死ぬ！

グダグダと会話しているとグレイドの視界が闇に閉ざされた。

!

ザ
シ
ユ
ツ

鮮血が飛ぶ。

「くっ！」

グレイドは地に倒れる。

㊦
 ・
 ・
 ・
 じゃ
 あな
 ・
 ・
 ・
 ㊧

視界が元に戻る。

「巫女はん！」

ケーワイの聲が頭に響く。

「ゲーム……オー……バー……か」

なんで？巫女補正最強じゃ……しかも召喚から数日で死ぬとか……

•

[illegible]

-
-
-
-
-
-
-

嘘1：終焉（後書き）

これでセナ編一時終了です！
次は現実少年です。

嘘2：現実少年の日常開始（前書き）

キャラ説

鍵沼 正義、死んだ雪村 千里の友人

嘘2：現実少年の日常開始

「・・・千里・・・」

俺は千里の棺に手をかける。

この前までは笑って過ごしていたのにここでいなくなるのは反則だ、千里。

今は千里の葬式をやっている。後ろの方では女子が固まって泣いている。

俺は泣かない、男だしな。

千里の亡骸が火葬場に運ばれる時、俺は家に足を向けていた。相性番号の1105を打ち、エレベーターの？ボタンを押す。

チクシヨウ、なんだって今に限って26階にいるんだ。

2、3分後に1階に到着したエレベーターに乗り、26のボタンを押す。が、14階で止まり、3、4歳程の子ずれの女の人が入り込んできて28階を押す。

「ねーね、ねーねー、ねーねー、お兄ちゃん遊んで遊んで」

「・・・・・・」

無視して聞こえてないふりをする。
シカト

今はそんな気分じゃないんだ、空気を読んでくれ、このクソガキがつ！

「ねーねー、ねーねー、ねーねー、無視しないでよぉー。うわぁーん」

泣き出されても困るし。俺が悪いのか？

仕方なく18階のボタンを押し、エレベーターを止まらせて降りる。子供はまだ泣いていた。

たくつ、これだから子供は苦手なんだ。・・・そういえば、職場体験は千里に合わせて幼稚園にしたよな・・・地獄の1週間だった・・・。

俺は階段を登りながら回想する。そのまま登り続けて26階まで到

達し、鍵を入れて回す。

ガチリ

ゆっくりと、戸を開ける。

確か、千里の読んでた本では異世界が広がってるんだよな・・・馬鹿ばかしい。

無論、いつもの廊下が広がっている。無言のままに玄関に入り靴を脱ぎ、自分の部屋に入る。制服から普段着に着替え、ベッドに転がる。

明日、学校だよな・・・

俺は寝てしまった。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪
アニメのOPだったか、EDだったか忘れてしまったが、携帯の目覚しが鳴った。

！？・・・俺はこんな音楽に設定してないぞ！また千里の仕業か！アラームを消してツールで設定を変えようとしたがなぜか 決定のボタンが押せなかった。
なんでだよ！

「正ちゃん。早くしなさい」

母親に呼ばれた。

正ちゃんはやめろ！

とにかく適当に返事して、朝飯食って、学校に行った。千里の席には白いマーガレットが花瓶に入れられていた。

今度、桜入れてやらなきゃな。千里は桜が好きだから・・・マーガレットは知らないけど・・・

嘘2：現実少年の日常終わり

小説本文 「……………」

椅子に座り、本を開く、千里に貰った物だ。俺は静かに読んでいたかったが邪魔された。

「ねーね、正君！知ってる？」

「人に物事を聞く時は主語と述語をそろえてください。」

俺に話掛けて来たのは千里と仲の悪いクラスメイトの吉村^{よしむら}。なんと

かというやつだ

「堅いなあゝ、まあいいけど、雪村なんだけど、家に車が突っ込んでオサラバしちやっただんでしょ。でもねえ、犯人がわからないのおゝ」

こいつつ！千里を！

「あの勢いで突っ込んだら犯人も即死らしいんだけどお、車の中に居なかったのよあゝ、しかも乗ってた形跡もないのよ。ようわあゝ、無人の車に突っ込まれたってわけゝ」

「なっ！」

キンコーン

「あつ、そろそろ先生くるなあゝ、じゃあね！」

クソツ、なんなんだよっ！

授業が始まった。俺は窓ぎわの席でじつと、外を見ている。

なんなんだよ！なんなんだよ！なんなんだよ！なんなんだよ！なにがどうしたん……………！

俺は信じられない物を見た、野球ボールが空中で回っている。外で体育をしているので当たり前だが、ボールは空中で静止している。

な！嘘だろ！

ボールは真っ直ぐに俺に向かって来た。ガラスを突き破り、俺の米神にぶつかる。

「う．．．そ、だ．．．ろ．．．」

周りから悲鳴が上がるが聞こえない。

「．．．．．」

セ．．．ン、リ．．と．．おな．．じ．．

切れた、何が切れたかは、わからないが切れた。

切れた、命が？意識が？繋がりが？何が切れた？何が切れた？何が切れた？

「おい、ヴァン！」

．．．ヴァン．．．？

「！」

嘘2：転生

不意に名前を呼ばれた。

「……名前……俺はヴァンじゃない、正義だ。いや、待て、俺はヴァンだ……！という事だ！正義の記憶が在る、全てが切れた事を覚えている！だがヴァンの記憶もある！」

「ヴァン？どうしたの？ご飯よ！」

「うん！今行く！」

反射的に言ってしまう。いや、いつもの事だ。

どうやら、俺は転生という非常識な目に在ったらしい。青い髪に目の5、6歳の子供になっている。

今は自分の部屋にいた。ベッドに暖炉、テーブルに横長の椅子がある。かなりの広さで外は吹雪というのに暖かく丁度いい温度だ。

俺は部屋をでて階段を下りる。茶色のセーターにズボン、日本の冬の様子と変わらないが青い髪と目が異世界である事を証明している。俺は自分の席に着く、広いテーブルだが父親、母親、子供ヴァンの3人が座っている。この家は豪邸だ。それもそのはずこの家はここ、アスカ領の領主だからだ。だが高飛車な態度は取らず、平民の様な態度で皆に接している。千里曰くの某いい人だ。

「遅かったなあ、ヴァン、せっかくの料理が覚めちゃうよ。」

「ごめんね、父さん」

「まあ、いいじゃないの。早く食べましょ。」

「うん」

家族3人での食事、心温まる風景だと思う……たぶん。

母親はヴィキア、見た目は華奢だが大食いの美人な某いいお母さんだ。父親はラーザン、ヴィキア一筋の某いいお父さんだ。

色々な事を話して食事を終える。真っ先に部屋に戻る。ヴィキアに「どうしたの？」と聞かれたが「あの、玩具が面白くて」とクリスマスプレゼント？の puzzles をだしにごまかした。

まず^ずはま^まとめ^めな^なけ^けれ^ればい^いけ^けない^い・[・]・[・]・[・]

嘘2：転生（後書き）

新キャラ名募集中

黒髪黒目

盲目

男

クール

イケメン

感想として送ってください。良いと思った物は使用させていただきます。

嘘2：まとめ完了

ヴァン・アスカ

俺・元鍵沼 正義 現在6歳 冷静 子供らしくない 青髪青目

ヴィキア・アスカ

母親 現在28歳 華奢 大食い 某いいお母さん 青髪赤目

ラーザン・アスカ

父親 現在29歳 ヴィキア一筋 某いいお父さん 青髪？目 糸目なので分からない

クロス

友人 現在6歳 喧嘩強い 白髪金目 義に熱い 男

ファンシ

友人 現在5歳 弱い 茶髪栗目 泣き虫 ビビり 女

メイド・執事・村人 良い人達

ジン

元冒険者 良い人 イケメン 緑髪水目 男

ギン

ジンの姉 良い人 美人 隻眼（生まれつき） 赤髪紫目 女

嘘2：日常

「あー、夢じゃないか・・・」

子供が寝るには大きすぎるベッドで目が覚めた。

あーあ、気絶してる時の夢で目が覚めたら病院っていう展開を期待していたけど・・・まあ、ヴァンの6年の記憶が在るからなあ。

矛盾だ、矛盾。

俺は服を着て、下に降りる。朝ごはんを済ませてどうするかを考えているとヴィキアに「クロス君とファンシちゃんが来てるわよ」と言われた。

約束をしてたんだ・・・

俺は急いでコートを着て「行ってきます。」で出ていった。

「おせーぞ！」

「そうだよ〜」

「・・・ごめん」

いや、本当にごめん。こんなややこしい事になるとか思わなくてさ・

・

「まあ、さつさと行こうぜ！」

「うん！」

え？何処に？あ、ちょ、走るな！追いかけるしか無くなるじゃないか！あージンさん家か！思い出した！修行だ！・・・修行？

俺がダッシュしながら思考しているとクロスとファンシが止まる。

もちろん俺も止まる。前には民家がある。俺とクロスの師匠ジンとファンシの師匠ギンの家だ。俺は剣技、クロスは格闘技、ファンシは魔術を習っている。

「師匠！」

「ししよっ〜！」

「し、師匠！」

ああ、そう言えば千里は「お師匠様」言ってたよな〜

「おう？クロスにヴァンか！お！ファンシも、姉貴！ファンシが来たぜ！」

ジンが外に出てきた。

「おっ！ファンシかぁ！」

ギンも出てきた。

稽古が始まった。

カン！

木のぶつかる音が響く。俺の放つ木刀での攻撃がジンに受け止められた。転生するとチート能力が手に入ると千里が言っていたがそんな能力は無い。神様は地道に頑張れと思っているらしい。だから地道に頑張っている。「冒険者になりたい」とクロスが言った。俺も「剣士になる」とファンシは「なら魔術師になると」三人は約束した、大きくなったら冒険者になると。

「はは、何だか強いなあ、君達の目は。じゃあクロスの番だぞ！」

俺はクロスと交替して座り、ファンシを見た。

「ほら、やってみな」

「うん！？小火？」

ファンシの右手から小さな炎が生まれた。

「消して！」

「あ！うん！」

炎が消えた。皆順調に強くなっている。が、三人での旅は無理だとわかった。俺は次期領主、ここからは出られない筈だ。

嘘2：日常（後書き）

しばらくはテストなので更新できません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4622x/>

召喚(転生)された(した)オタク少女(現実少年)

2011年11月15日09時36分発行